

十種啓蒙
讀書法
甲編
全

特34

961

館	館	館	館
函	函	函	函
架	架	架	架
號	號	號	號
一	二	三	四
冊	冊	冊	冊

101509-000-2

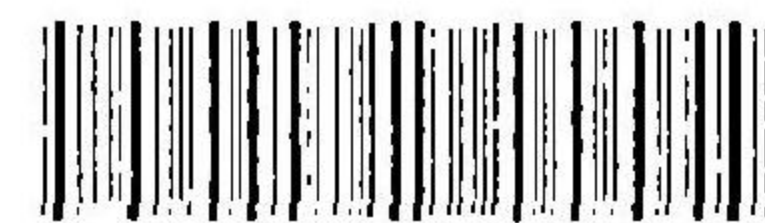
特34-961

讀書法 (啓蒙十種) 甲編

日柳 政愨 / 著

M13

EAA-0069



明治十三年十一月

啓蒙十種讀書法



浪華文會印行



特34
961

十啓種讀書法 甲篇 目次

第一章 假名讀法

假名ノ體

一丁

假名ノ音

二丁

音便呼法

三丁

假名略字

五丁

第二章 本字讀法

本字ノ形

七丁

扁冠名義

七丁

畧字

九丁

古字

九丁

本字ノ音

十二丁

第三章 雅言熟字讀法

雅言ノ解

十一丁

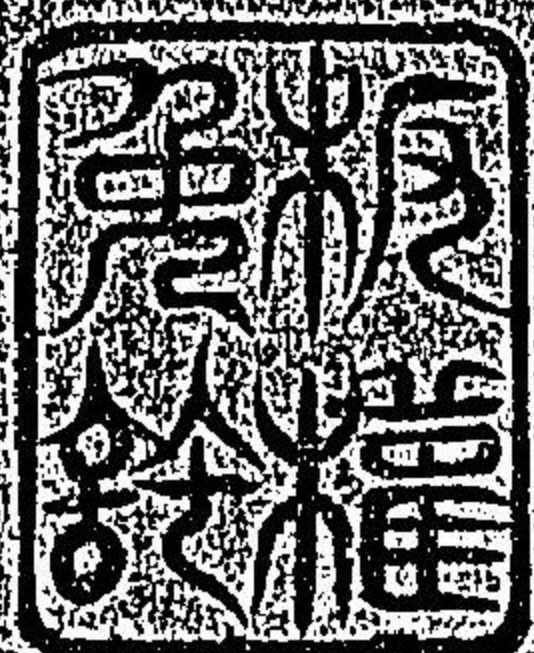
熟字ノ解

十二丁

目次

明治三十三年十一月

啓蒙 十種 讀書法



浪華文會印行



特34
961

十啓
種讀書法 甲篇 目次

第一章 假名讀法

假名ノ體 一丁 假名ノ音 二丁

音便呼法 三丁 假名略字 五丁

第二章 本字讀法

本字ノ形 七丁 扁冠名義 七丁

畧字 九丁 古字 九丁

本字ノ音 十二丁

第三章 雅言熟字讀法

雅言ノ解 十一丁 熟字ノ解 十二丁

目次

第四章地名人名讀法

習慣讀法

十二丁

地名畧語

十三丁

洋語讀字類

十三丁

義譯音譯

十五丁

通稱及號

十五丁

實名字類

十六丁

第五章句點及捨假名反點接續符法

句點例式

十七丁

漢文讀法

十九丁

第六章字書用法

畫利ノ法

十九丁

扁冠利法

同

啓蒙十種讀書法自次畢

啓蒙十種讀書法 甲編全

日柳政愬著

第一章假名讀法

凡る兒童の始めて書と讀むに、假名より學ぶと法とす、假名ハ都て字体最も簡畧にして誰も其を看み易く、殊に字數を随ふて少なくして記臆するに甚と便なり、故に我邦に於てハ之を讀書の階梯となせり、

假名の体ハ三種あり、即ちアイウ此体と片假名と云、いろハ此体と平假名と云、以迄之、此体と別

体と云、諸体とも其數ハ五十個即ち五十音に合
 せたる者なり、而して一字毎ハ一音と有ち西國
 乃如く二字と綴りて一音と生ずることと要せ
 す、

三体の假名其体に依て字形ハ差別あり、片假名
 の体ハ字形概ホ方なる形となし、平假名ハ圓き
 形と為せり、別体ハ平假名に似て字畫較多し、故
 に其字形と一見するも以て其何体たる由とを
 別つハ足るへき區域と有せり、
 假名の字形最も簡畧なる所以ハ、或を一畫にし

て既ハ字形と成し、即ち「パレペ」の如く、縦令多
 きも四畫ハ過ぎず、

假名を此の如く甚ハ簡畫なるを以て、其字も一
 々其趣を殊に自ら物形ハ象とれり、故に之を
 讀むも他の物形に比例し、由れを記憶すれば讀
 て忘るゝ由と無く、又憶ひ起すに至便なり、譬へ
 ハ「ア」ハ釘の形に類し、「ウ」ハ帆の形に肖、
 「ハ」ハ橋の形に合へり、曾て「ウ」の字ハ帆の形なる由とを
 記し得れり、其帆の形ハ肖たるを見れば直ちハ
 「ウ」の字なることを想像し來るべし、

五十音の順序ハ別に義理あるに非ず、唯其發音の同じき者を一行ニ集めたる迄なり、假名文字乃中其右傍に點を加へて平常に異なる音を生ず、而して此點に二種ありて、○と半濁點と云、此點を加へれば即ちハ。ピ。フ。ヘ。ホの如く半ハ濁りたる音を生ず、ハと濁點と云、此點を加ふまハ全く濁りたる音を生ず、即ちガ。ギ。グ。ゲ。ゴの如し、五十音の中讀て同音を生ず、ハ字あり、即ちイ。ヰ。エ。オ。ヲ。チ。ヅ。ズの如し、五十音の外一の掣とらる音あり、斤假名にてヅと書

き、平假名にてんんと書き、何れも字形の尾と掣たる如く掣昂けて讀むなり、おれと讀にハ都て上に位する字音に隨ひ其尾を掣るなり、即ちてんんトんんさんと讀の類なり、

五十音の中綴り合せの語勢に依り常に變りたる音を生ずる處とあり、即ちハ。ピ。フ。ヘ。ホの五字外の字乃下まり連り讀て、ワ。イ。ウ。エ。オの音に通ふ、其例かかと皮かわと讀み、かひと甲斐かいけふと今日けうう上へうにかほとか類をと讀むへし、まをかほうへと本音の如く讀てハ通用せざはへし、

ハヒフヘホの字外の字と配合し、入聲又ハ掣音の下に連讀するときハ、半濁の音に讀むべし、即ち出帆ゆつはんやゆつばん、かんひやうとかん飄ひやう春ゆんふうを風いゆんふう、かん勘へいをか鉄砲んへい、こつぽうとてつぽうと讀の類なり、アイウエオの五音掣音の下に連り讀て十二又ホの音に通ふ其例善悪ぜんあくぜんなくと讀、延列えんれんと云云ん、うん云云とうんぬん、縁えん音いんぬん、觀くわん音ねん勤きん、王わうときんのうと讀の類なり、

づの字ハ即ち入聲なるを以て、他の文字の中間へ連讀すれハ詰めて短ろく讀む可し、其例出ゆつせ世、結けつ構、折かうせつ角かくの類にておきを詰めます、また一字宛讀下させハ終に語をなます、くの音うの音も亦他の字と連讀するときハづの音と同一く詰めて讀む可し、其例北ほく方ほうと徳とく行かうと各こく國こくをか格かく好こうと法ほう度こをはつとと讀む如し、

字音連續の語勢に依り、清めたる音も濁りて讀

むことあり、譬へをさうさいとさうざい、なんぼく東となんぼく西、たち立はな花とたち高ばな津かう津つをか津づと讀むの類なり、

五十音各行の頭音下にうの音と連讀して其頭音即ち尾音に變ず、其例あうハたうに變しかうハこう、さうハさう、たうハこう、なうハのう、はうハほう、まうハもう、やうハよう、らうハらう、わうハわうと讀むなり、

みの字他の字の間に挿まれハむに通ふ、其例いみ部といむべとみだをこむたかみさきをかむ

ぎき、ゆみてとゆむで、せみまろとせむまると讀むる如し、

假名二字と書して二音と得る所へ畧して一字と用ふ、おれと略字と云、其字ハ原二個の假名と併せ或ハ本字の畫を省きて作りたる者なり、即ちメ知、片、井、井、云々の字是なり、

假名の字數僅らに五十個なりと雖も、おれと綴りて詞となせと千言萬語も自在に書得べし、則ちいろはハ之と綴りて歌の詞となし、初心のものへ假名と讀易き為に作りたる者ふて、即ちい

の字とろの字と綴りていろと云詞となり、ちと
りと綴りて散ちりとなし、かど綴りて我わがと
なしたる者なり、

送假名の字体ハ、を一字送りと云ひ、平假名片
假名ともに同一都て餘の文字の下に在りて上
頭の字音通りに讀むなり、其例註、乳、耳、桃、
、乃類なり、

二字の送假名あり、片假名にてと、と用ひ平
假名にとハ、と書けり、之と讀にハ上の法乃如
くして上頭の二音と疊て讀むへ、則ちイヨ

く、だんくの類なり、

字音と長く引て讀む為小用ゆる字あり、其体を
と書たり、之と讀むハ上頭にある字音小連
ぬ、其字形の如く引て讀むへ、其例あ、い、う、
、に、は、に、の、如し、

假名の讀法上の諸式と能く諳し、然る後書籍に
就き其功と試むへ、此諸法と知らずして初め
より書籍と讀下し、唯練習に因て後稍此諸法と
解するに至るハ、徒らに心力と勞する而已なら
ず、讀下中意味と解せざる多し、今此假名讀法

と終らんとして更に書籍上に於て心得べき一事あると示す、都て濁音半濁音とも字傍の點と目的とするを法となせとも、書籍に依てハ此點と畧して施てさゝる者多し然れとも句中の語勢に依てハ之と濁りて讀まざるハ意義通せざるへ、譬へをあらざるへとの一句に濁點なきもあらざるべしと讀むべし、

第二章本字讀法

本字の形ハ其始め物の形ハ象とり、或ハ道理に依て制したるなり、故に山の字ハ自ら山の形と

なり、川の字ハ正ハ川の形に似て木の字に枝根あり、艸乃字に芽葉を具へ、車ハ車に象とり、傘ハ傘に肖、口ハ口、目ハ目の形を為せり、故に其字形を見ても畧其字義の在る所を知るに足る、是本字と讀むの捷法にして、加ふるに字ハ徒らに作りたる者に非ざるを知る可し、又鴉の音をおと讀み、蚊をぶんと讀むも皆其物の聲に取りたるなり、

本字皆頭脚あり其頭と冠と云、又構と云、左の傍と扁と云、右の傍と旁と云、又脚の所に受けたる

更に字と書する處とと煩ハさす又書籍と用ひ
すして口つから其字形と述ふる處とと得へし
譬へも何扁に何と書ける字ハ何と云の如く言
語にて盡す處とと得へし

扁冠と原と一佗の字畫と併せ、一種の字形と組
立る後其扁冠の字義と佗の併せたる字義とを
集め二義より一義と萌生す書と讀む者玩味す
へし、譬へハ門に口あれハ問と讀み、イに動ハ働
と訓、山風と嵐田の艸と苗木と並へて林と讀
の類、其他ハ字音の同一きより類似の義理と生

する者多し、即ち桐洞筒の如き皆中虚の意と有せし
本字亦畧字多し、始めハ其多畫の字と省畫して
速寫に便なる為に設けたれと也、或ハ書籍上に
て此類多きと以て此畧字と讀むの法と知らさ
きハ讀書の際困難と生す可し、畧字とハ澤と沢
と畧し、獨と独書と、昏區と区、圓と円、圍と田邊と
辺、處と処、辨と弁體と体、點と点、餘と余、盡と尽、亂
と乱、發と癸、寶と宝、靈と灵、傳と使、兩と両、壹と壹、
歸と皈、卒と卒、後と后、國と国、莊と庄、雙と双、辭と
辞、讀と読と書ける類なり、又箇とヶと書き、盧と

戸。聲と声と書きたるハ最も畧したる者なり、
 本字相通して用ふる字あり、又心得へし即ち華
 と花、硯と研の類なり、
 古代書せし字にて今猶通して用ふる字あり、即
 ち佛と仏と書き、以と呂、世と世、畫と画、徳と徳、明
 と明、又剛、歟と歟、秋と秋、與と与、鶴と雀と書ける
 類なり、

本字一字に就き二個の讀法あり、即ち音の讀訓
 の讀なり、音の讀とハ人の字としん、又じん、神の
 字としん、又じんと讀の類、訓の讀とハ人の字と

ひと神の字とかと讀の類なり、一般の本字皆
 此二個の性質を有てり、

音讀ハ吳音と云あり漢音と云あり、通俗ハ多
 く吳音を用ひ、雅言なとハ多く漢音を用ゆ、此
 二音の區別ハ地とち、人としん、神としんと讀え
 漢音にて地とぢ、人としん、神としんと讀ハ吳音
 かり、餘ハ之に準ふ可し、

音讀の法、二字を連讀するに上の字と吳音に讀
 めば、下の字も亦吳音に讀むし、上の字と漢音
 に讀めハ下亦之に同じ、譬ハ日月とドつぐわ

つと讀てハ体裁悪し、兄弟をけいだいと讀む可
らず、餘皆此類なり、

熟字と連も讀むに、上の字と音讀すまハ下亦音
讀し、上の字を訓讀すれハ下も亦訓を用ふ、此法
に依らずして世界をよかいと讀み、住居とトウ
いと讀てハ終に語を為さず、此類を湯桶讀と謂
ひて鄙めり、其ハ上の湯の字ハ訓讀よて下の桶
の字ハ音讀なきハなり、

本字の音ハ、大概ハ其字を配合せる主畫の音に
依まり、主畫とハ扁冠を除きて單に一個の字を

成せる者と云ふ譬へは時の字日の扁を除けハ
寺の字なるを以て即ち寺の音を有ち、花の字化
と主畫とするを以て化と讀み、起ハ已と主畫と
一己の音と其儘存せり、佗之に準ふ可し、

第三章雅言熟字讀法

書を讀む小雅言を解せされハ讀て義理の通す
るを得難し、雅言とハ古き詞又ハ上品なる詞小
て通常俗語と異なり、書籍上の文章ハ都て此等
の辭を用ひ野鄙なる俗語を用ひたるハと稀な
り、此詞の種類僅かにて左に擧ぐ類小過きす、故

に此法と熟知する亦難きに非ず、之を知らハ如何なる書籍上の詞も讀て通せざる處と無し、其目左の如し、

而して如^し欲^は雖^も既^に若^し遂^に苟^も難^し異^に
肯^ん必^ず未^だ速^し甚^う果^て殆^ど可^し曾^も
抑^て將^も蓋^し耳^を漸^く稍^も豈^に或^も敢^て恰^に
然^ら寧^じ則^で況^て殊^に危^い能^をず^ぬ可^ら
すぬ所以^に如此^に此外^に學^び勤^む怠^らの類な

雅言を解する後ハ熟字の道理を求むへし、熟字

ハ多く二字を連れ讀て一個の義を生ず、譬へハ
狡猾ハわるかしこ、周旋ハせわをする、倉卒ハに
たか、輻輳ハあつまる、關係ハかゝわる、等の如し
都て熟字ハ音讀すゆと法とす、

本字を以て物名を書するに、鶴龜松竹金石絲竹
の如く皆一物一字と專らとせり、然もとも二字
と熟用して二物の名とせる者あり、此讀法も亦
皆道理に依て製せる者なれ、縦令其物と見え
るも意を用ひて之と讀め、其物と思想し得へ
し、例へハのりと海苔と書き、たぐことを煙艸、かつ

ほと堅魚、うちハを團扇、きくらげを木耳と書き
たる類なり、

第四章地名人名讀法

我邦の地名ハ習慣小依音訓相混して讀と法と
す、譬へハ山城ハ訓讀小て、丹波ハ音讀なり、大阪
ハ訓讀小て東京ハ音なり、角田川を訓にて安治
川は音なり、又攝津の如きハ一語中に音訓あり、
支那の地名ハ盡く音讀すへし、其外萬國地名ハ
或ハ假名を用ひ又こまを本字に譯せり、
地名の著き者ハ、畧して唯其頭字のみを用ひ音

讀するも例とせり、内國の如き武藏と武州、山城
と城州、攝津と攝州、又連續して城攝、又播備とも
讀めり、即ち山城攝津、又播磨備前等の事なり、海
外も亦英吉利と單に英國と云、佛郎斯と佛國、魯
西亞と魯、阿米利加と米、歐羅巴と歐と云へり、
萬國の地名或ハ人名と本字にて書したるハ、唯
其音と假用ひたる迄も綴りたる字につき別
に意義あるに非ず、故に其用ふべき字も限あり
て、其讀法小熟すれば本字を用ひたる地名も隨
意に讀むべしと得へし、今之を五十音の順に依

り爰に示す、

○洋語譯字類

ア。阿。垂。イ。伊。以。意。威。維。ウ。宇。烏。工。葉。埃。陀。日。才。阿。

疴。呵。窩。

安。暗。英。翁。

力。加。喀。曷。革。キ。其。幾。基。ク。古。克。ケ。克。基。コ。哥。可。科。

各。格。戈。

干。堅。公。君。工。

廿。沙。撒。薩。察。色。シ。悉。矢。什。西。齊。是。叙。ス。士。斯。思。蘇。

私。セ。塞。食。ソ。所。蘇。

三。森。贊。桑。生。

夕。多。太。達。陀。答。チ。智。地。底。低。剔。ツ。圖。テ。特。的。卜。多。

都。土。的。突。督。

當。坦。典。甸。敦。頓。

十。拿。那。納。内。二。尼。泥。又。努。奴。不。泥。匿。納。内。ノ。諾。那。

紐。新。

八。布。哈。ヒ。喜。費。フ。法。佛。普。非。弗。へ。邊。勿。希。黑。意。歇。

小。福。合。

マ。馬。瑪。麻。滿。麥。三。密。米。梅。彌。麥。ム。武。メ。賣。米。默。迷。

美。モ。莫。摩。門。模。木。

滿蒙

十牙。イ前見。工同。工同。ヨ沃。玉。

ラ羅。拉辣。刺臘。萊リ利。里黎。理立。ル再。兒而。耳呂。

レ来。列勒。口勒。魯落。羅洛。路樂。

蘭郎。命龍。連稜。

ワ哇。華瓦。窪牛前見。ウ同。エ同。ヲ同。

ガ瓦。我馬。牙ギ。又幾。グ卧。克ゲ。ゴ悟。我鄂。

温恩。俺安。

ガジ。日地。ズ士。ゼ則。日折。熱ゾ。

鑽

ダダ。打太。達大。チ地。ツ圖。デ德的。弟ト。獨土。德度。

丁甸。敦動。

ハバ。拔罷。ビ比。昆卑。ブ貌。伯微。ベ白。ホ淳。捕婆。

買榜。綱孟。

ハバ。把玻。ピ比。皮必。卑ブ。布普。字不。朴ペ。伯百。邊。

ホ波。坡。

本

地名に義譯なる者あり、前の音譯の如く讀むべからず、通常音讀して其譯字に義理と含めり、即ち地中海、喜望峯、裏海、氷洲等の如きは是なり、又音

義と一に混して讀む者あり、新約克新西蘭の如く、新ハ義に取約克西蘭ハ音に取りきり、人名と讀むに、姓あり、苗字あり、姓とハ源平藤橘の如く、苗字とハ楠新田足利の如き是なり、此讀法ハ皆訓讀すべし、偶々音讀あれとも多からず、名に通稱あり實名あり、又號なる者あり、通稱ハ猶地名の如く音訓相雜リ即ち權兵衛ハ右衛門、虎吉、龜平の如く、實名の讀法ハ訓讀となすと雖とも亦通常の訓と異なり、譬へハ頼の字ハ通常たのむと讀めともたれとよりと讀み、朝の字ハ

常にあさと讀めとも更小ともと讀むなり、是も亦大抵其用ふる字ハ多からざるを以て左に舉ぐる字の讀法を解すれハ一般の實名を讀むに甚々容易なるふとを得べし、其餘ハ多く字義小因てたれと讀むべし、

○實名字類

一。之。少。仁。公。光。孝。良。利。武。宗。
此。治。幸。知。政。信。保。英。俊。義。
敏。純。致。概。泰。師。通。教。康。朝。景。
尊。茂。資。經。業。德。頼。與。親。

昌。は實。か。

蹄及ひ僧の名ハ都て音讀す可し、即ち空海親鸞
幽齋一徹と讀る如し、

支那の地名人名ハ素より音讀すへき事とす、即
ち齊楚燕趙蘓秦張儀と讀むへし、

第五章句點捨假名及點接續符法

書と讀むに初め小文字の傍に施したる符に意
を用ふへし、此法を知るに疎鹵なれた、字句の断
續意義の所在と解し難し、此法小熟すまハ縱令
句點無き書と讀と雖も滯滞せざるへし、而して

此符に數種あり、其例を左に擧ぐ、

句點例式

○。或ハ。六。を。平。節。點。と云ひ、多。く。一。句。又。ハ。一。
字。と讀切る所用ひたり、

○。或ハ。一。之。を。分。點。と云ひ、多。く。ハ。地。名。人。名。物
名等佗字義と混せざる為用ひたり、此點ハ
或ハ字の左傍小施し、或ハ右傍に附せり、此點
時として、
レ。口。口。へ。如此數種の体あり、然
れとし其理は上に同し、

○。之。を。畢。點。と云、一。章。の。讀。切。り、或ハ。一。篇。の。義

理盡きたる所に用ひたり、
 〴〵之を段落點と云、此符ハ一篇の義理全ク終
 其行の字句次の行の字句に續かしめざる為
 に用ひたり、
 〴〵之を括弧と云、幾種の字句を一つに總へ
 括りたる所に用ひ、
 石の諸符其一例を舉ぎハ左の如し、
 神。人。天地。萬物。神ハ。天地の主宰にして。人ハ萬
 物の靈なり。

神武天皇ハ大和に都し玉ふ

三府 東京 京都 大阪

◎或ハ〴〵之と字眼點と云、一篇一章中に於て其
 章句の最も緊要なるべき字の傍に施せり、此
 點と數個重ねて一句或ハ一章に施こす者あり、
 其一句一章ハ篇中に於て最も妙境たるを表す
 るなり、
 捨假名ハ凡て轉讀文に用ひて、即ち本字の傍の
 下邊へ一二の假名と付し、本字の義と通暢し、佗
 の字との間と接續せしむ、

反點と云も倒逆文に用ひて讀むに便ふす、即ち本字の左傍の下邊つレ、及ひ一二三、甲乙丙、上等の符と付けたり、レの點ハ一字上の字に及びて讀み、一二の點ハ其一の符より二乃符の付きたる字に及びて讀み、一二三の符も其順序を追て及び讀むと猶一二の符の讀法と同じし、中下、甲乙丙の點ハレ、及ひ一二三の符と施こせる上に猶遠き章句に轉讀せんとする所に用ひ、其之と讀むハ一二三の符と讀む法に同じ、
接續符ハ、字と字の間に縦線と引きたる者にて、

二字或ハ三四字と一氣に引續け讀まむる為なり、

右諸種の點其一例を示せハ、即ち下の如し、

先是帝自日向東征將一舉平定中原
天皇詔彼地當足以恢弘大業光宅天下

第六章字書用法

讀書ホ、諸法を領會する後獨見するに至りてハ、字書ハ最も要用の品にして坐右に置かざるを得ず、而して字書に數種ありてこれと用ふる各其法と異にす、通例畫列の字書ハ其求むべき

字の點畫を算へ求むへ、其法ハ一畫とハ一。一。を云ひ、又フレの畫ハ二畫の如く見ゆれとも其畫の續きたるを以て一畫とす、今畫數を以て字を引くに譬へハ口の字を索むるに、其畫ハ一。フ。一と都合三畫なるを以て字書の三畫の部を見るへ、又扁冠に依て引へき字書ハ其扁冠の部類に隨ふて求むへ、例へハ松の字を求めん小其扁ハ才なるを以て木扁の部に就き、旁の公の字の畫數を算すれハ四畫なるを以て、其部内四畫の條を尋きハ之を得可し、又五十音、以呂波

假名の順序に依れる字書あり、或ハ天文地理動植等乃部門に分ちたるあり、然れとも初學の間ハ通常扁冠に依りたる簡易なる字書を用ふるを宜とす、

啓蒙讀書法 甲篇終

明治十三年十月二十三日版權免許



愛媛縣平民

著者兼出版人

日 柳 政 愨

大阪府東區内久寶寺町
二丁目十三番地寄留

